

結果構文における事象の時間関係

三輪 健太

1. はじめに

本稿は、英語の結果構文と等位接続文という異なる構文の間に結果の解釈が共通して存在することを指摘し、それらに共通する特性として原因事象と結果事象の時間関係が存在することを指摘する。また、その事象間の時間関係の決定に結果構文に用いられる語彙がどのように関与し、それがどのように言語表現の上で現れているかを明らかにする。

結果構文とは、動詞が表す行為によって起こる目的語の状態変化を結果述語によって表した構文を指す。(1a)の例は、主語 John が目的語 the metal をハンマーで叩いた結果、目的語 the metal が結果述語である flat な状態へと変化したという事象を表している。(1)と(2)は、用いられる動詞の種類に応じて結果構文を分類したものである。

(1) 他動詞型結果構文

- a. John hammered the metal flat.
- b. The waitress wiped the table clean.
- c. Mary painted the wall red.
- d. Chris shot Pat dead.

(2) 非能格型結果構文

- a. The joggers ran their Nikes threadbare.
- b. The teacher talked his student asleep.
- c. Dora sang herself hoarse.
- d. The teenager laughed himself sick.

(1)の結果構文には他動詞が用いられており、(3)のように結果述語を削除しても文法的となることから、目的語が動詞によって選択されていることがわかる。一方、(2)の結果構文には非能格動詞が用いられており、(4)に示すように、結果述語を削除すると非文となる。このことから、(2)に現れる目的語は、動詞によって選択されていないことがわかる。

- (3) a. John hammered the metal.
 b. The waitress wiped the table.
 c. Mary painted the wall.
 d. The student rolled the curtain.
- (4) a. *The joggers ran their Nikes.
 b. *The teacher talked his student.
 c. *Dora sang herself.
 d. *The teenager laughed himself

本稿では、他動詞が用いられる(1)の結果構文を「他動詞型結果構文」とし、一方、非能格動詞が用いられる(2)の結果構文を「非能格動詞型結果構文」と呼ぶことにする。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、結果構文と結果の解釈を持つ等位接続文とを比較し、両者に共通して働く結果の解釈を生む原理が存在すること指摘する。3節では、両構文に共通する特性として原因事象と結果事象との時間関係を取り上げ、これらの構文には二種類の事象間の時間関係が存在することを明らかにする。4節では、結果構文における事象間の時間関係が、どのような要因によって決定するかを確認する。5節は結語である。

2. 等位接続文と結果構文

本節では、結果の解釈を持つ等位接続文について考察し、結果構文との比較の中で、両構文に共通する事象間の時間関係があることを指摘する。

等位接続文の中には意味的に非対称的なものがみられ、原因と結果の解釈が成り立つものが存在する。

- (5) 結果の解釈を持つ等位接続
- a. Roy called a secret meeting and offended Bob and Jeff.
 b. The children heard the news and broke down in tears. (Goldsmith 1985: 135)

(5a)は Roy が a secret meeting を開いたという事象と、Bob と Jeff の心証を害したという事象が等位接続詞 and によって並べられているが、これらの事象をそれぞれ原因事象と結果事象として解釈することができる。このことは、(5a)を(6a, b)のようにパラフレーズできることから確認できる。

- (6) a. Roy called a secret meeting and in so doing offended Bob and Jeff.
b. Roy's calling a secret meeting was offensive to Bob and Jeff.

(Schmerling 1975: 218)

この例に示されることから、(5)の両事象が原因と結果の関係にあることがわかる。等位接続文には、このように単に構成素を等位の関係で結びつけるだけでなく、両者の間に付加的な意味を与える用法が存在する⁽¹⁾。

また、等位接続文に限らずとも、二つの文を接続詞なしに並置したパラタクシスの例においても、同様に結果の解釈が得られることがある。

- (7) The light turned green. The cars began to move. (Goldsmith 1985: 139)

(7)は、信号が変わったことにより、車が動き出したことを表している。このパラタクシスの例も(5)の例と同様に、結果の解釈を有すると判断できる。このことから、等位接続詞を持たずとも、結果の解釈が生じる場合があることがわかる。

これらの構文に共通していることは、二つの命題が並列関係にあるということである。このことから、結果の解釈を生む原理を以下のように仮定する。

- (8) 結果の解釈は、因果関係にある二つの命題を並置することで得られる。

(5)及び(7)の例では、並列関係にある動詞句もしくは文そのものが因果関係を含みうるということがわかる。このように、因果関係を持つ二つの命題が並置されることで、これらの表現が結果の解釈を持つと考えることができる。

ここで、この結果の解釈を生む原理(8)が、結果構文においても同様に働いていると仮定する。結果の解釈を生む各種の言語表現に対して、異なる原理が個々に働いてい

ると想定するよりも、結果の解釈を生む単一の原理(8)が、各言語表現に対して共通に働いていると考える方がより妥当であると考えられる。このことから、結果構文の結果の解釈が、因果関係を持つ命題が並置されることで得られると捉え、(1a)と(2a)はそれぞれ次のような構造を持つと仮定する。

- (9) a. [John hammered the metal] & [the metal BE flat]
b. [the joggers ran] & [their Nikes BE threadbare]

結果構文が表す事象は、原因事象と結果事象の二つに分けることができ⁽²⁾、それらを並置すると(9)のようになる。他動詞型結果構文の下位事象を表す(9a)では、主語、動詞、目的語で構成される他動詞文を原因事象とし、目的語と結果述語で構成されるコンピュータ文を結果事象として分析することができる。また、非能格動詞型結果構文の下位事象を表す(9b)では、主語と動詞で構成される非能格動詞文を原因事象とし、目的語と結果述語によるコンピュータ文を結果事象として分析することができる。このように、他動詞型結果構文であれ、非能格動詞型結果構文であれ、結果構文が表す事象は原因事象と結果事象の二つの事象に分けることができ、結果構文が持つ結果の解釈は、それらの事象を(9)のように並置することで得られると考えられる。

3. 結果の解釈と事象間の時間関係

結果の解釈を持つ等位接続文と結果構文は、原因事象と結果事象が並置されるという点で共通することを前節で主張したが、二つの事象が原因と結果の関係にあると判断されるためには、その判断決定のための要因が存在するはずである。本節では、その要因の一つとして事象間の時間関係を取り上げる。

はじめに、等位接続における事象の時間関係について考察する。まず、前節で確認した結果の解釈を持つ等位接続文を再掲する。

- (10) 結果の解釈を持つ等位接続
a. Roy called a secret meeting and offended Bob and Jeff.
b. The children heard the news and broke down in tears. (= (5))

(10a)では、原因事象である Roy が a secret meeting を開いたという事象が、結果事象である Bob と Jeff の心証を害したという事象に対して時間的に先行しているのに対し、(10b)では、原因事象である子供が知らせを聞いた事象と、結果事象であるその子供が涙したという事象とが同時点での事象であったという解釈が可能である。このように、同じ結果の解釈を持つ等位接続文でも、二種類の時間関係が存在することがわかる。

次に、結果構文の事象間の時間関係に関して考察する。結果構文における事象間の時間関係について、Rothstein (2004)は、結果事象の経過時間が原因事象の終結点において重なっていなければならないとしている⁽³⁾。つまり、結果構文が表す原因事象と結果事象は時間的に接点を持っていないなければならないというのである。

一方、Rappaport Hovav and Levin (2001)、Wechsler (2005)では、事象間の時間関係が接点を持たない解釈をもつ結果構文の存在が指摘されてきた。(11)のような再帰代名詞を伴う結果構文では、Rothstein の主張する時間の依存関係は必ずしも要求されない。

- (11) a. Dora sang herself hoarse. (=2b)
b. Mary danced herself tired.
c. Those teenagers laughed themselves sick. (=2d)
d. The teacher talked himself blue in his face.

(11a)は Dora が歌を歌い、その最中に喉をからしたという解釈も可能であるが、歌を歌った後、しばらくして声がかれたという解釈も可能である。このことは、再帰代名詞を伴う結果構文が次のような文脈でも使用可能であることから確認できる。

- (12) Sam sang enthusiastically during the class play. He woke up hoarse the next day and said, 'Well, I guess I've sung myself hoarse.' (Rappaport Hovav and Levin 2001: 775)

(12)の例では、歌を歌った次の日に喉がかれていたことが context によって示されており、それにより、I've sung myself hoarse という再帰代名詞を伴った結果構文の原因事象と結果事象が時間的に隔たっていることがわかる。このように、結果構文の事象間の時間関係には、結果の解釈を持つ等位接続文と同様に、2種類の時間関係が存在する。

このように、結果の解釈を持つ等位接続文と結果構文が含む二つの下位事象には、共通して二種類の時間関係が存在する。このような二種類の結果の時間関係に関する観察は、因果関係に関する哲学的考察の中でも伝統的に議論されてきた。Dummett (1978)は、因果関係を原因事象と結果事象との時間関係によって分類し、近接の因果 (immediate cause and effect)と遠隔の因果 (remote cause and effect)という二種類の因果関係を提案している。本稿ではこの分類法を採用し、両事象が時間的に接点を持つ関係を「近接関係」とし、両事象が時間的に隔たっている関係を「遠隔関係」と呼ぶ。これらの時間関係を図示すると(13)のようになる。

- (13) a. 近接関係 (近接の結果構文) b. 遠隔関係 (遠隔の結果構文)



本稿では、事象間が近接関係を持つ結果構文を「近接の結果構文」とし、一方、両事象が遠隔関係にある結果構文を「遠隔の結果構文」として分類することにする。(13)の図では、近接の結果構文では原因事象である e_1 が結果事象である e_2 に近接しているのに対し、遠隔の結果構文では、 e_1 と e_2 は接点を持っておらず、両事象が時間的に隔たっていることが示されている。

このように、二つの事象の間に因果関係が認められる状況において、原因事象と結果事象との時間関係は、近接関係と遠隔関係の二種類が存在する。

4. 事象間の時間関係とスケール構造

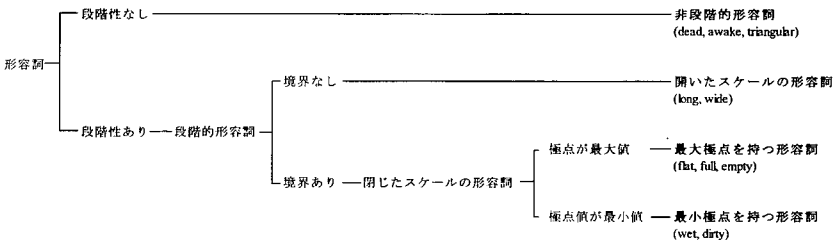
結果の解釈を持つ等位接続文と結果構文は、ともに二種類の事象の時間関係を有しており、それらはそれぞれ近接関係と遠隔関係とに分けられることを確認したが、ここで、これらの時間関係が言語表現の上でどのように決定されるかという問いが生じる。本節では、近接関係と遠隔関係の2種類の時間関係が、言語表現の上でどのように表れているかを考察する。

4.1 スケール構造を用いた結果構文研究

ここで、Wechsler (2005)における結果構文の事象の時間関係に関する先行研究を検討する。Wechsler は、他動詞型結果構文と非能格動詞型結果構文の分類に応じて、結果述語として用いられる形容詞のスケール構造が異なり、それと動詞の時間幅との対応で事象間の時間関係が決定すると主張している。

形容詞のスケール構造とは、形容詞が持つ段階性を捉えた概念であり、形容詞をその段階性の有無や境界の有無などに応じて分類したものである⁽⁴⁾。形容詞は、まず段階性の有無によって大別でき、それにより段階的形容詞 (gradable adjectives)と非段階的形容詞 (ungradable adjectives)とに分けられる。非段階的形容詞とは、dead や awake のように、形容詞が表す状態に段階性が見られない形容詞のことを指す。段階的形容詞は、さらにその段階性が境界の有無によって分けられ、開いたスケールの形容詞 (open scale adjectives)と閉じたスケールの形容詞 (closed scale adjectives)とに分けられる。開いたスケールの形容詞とは、形容詞が表す状態の境界、つまり極点を持たない形容詞のことを指し、例として long や wide などが挙げられる。閉じたスケールの形容詞は、さらにその極点が形容詞の持つ段階性の最大値を表すか最小値を表すかによって分けられ、最大極点を持つスケールの形容詞 (maximal end-point closed scale adjectives)と最小極点を持つスケールの形容詞 (minimal end-point closed scale adjectives)とに分類される。flat や full などの形容詞は、極点が最大値を表すために最大極点を持つ形容詞と分類されるのに対し、wet や dirty などは、極点が最小値を表しているために最小極点を持つ形容詞と分類される。(14)に Wechsler による形容詞のスケール構造の分布を示す。

(14) 形容詞のスケール構造の分布



以上が Wechsler による形容詞のスケール構造であるが、Wechsler は他動詞型結果構

文には非段階的形容詞と最大極点を持つスケールの形容詞が起こり、非能格動詞型結果構文には開いたスケールの形容詞が生起するとしている。さらに、Wechsler は動詞句の時間幅と結果述語のスケール構造との対応を指摘しており、他動詞型結果構文では、時間幅を持つ動詞句に対しては最大極点を持つスケールの形容詞が起こるとし、時間幅を持たない動詞句に対しては非段階的形容詞が起こるとしている。(1)と(2)を再掲し、以上の Wechsler の主張を確認する。

(15) 他動詞型結果構文 (= (1))

- a. John hammered the metal flat.
- b. The waitress wiped the table clean.
- c. Mary painted the wall red.
- d. Chris shot Pat dead.

(16) 非能格型結果構文 (= (2))

- a. The joggers ran their Nikes threadbare.
- b. The teacher talked his student asleep.
- c. Dora sang herself hoarse.
- d. The teenager laughed himself sick.

(15)の他動詞型結果構文を動詞句の時間幅によって分類すると、(15a-c)の動詞句が時間幅を持ち、(15d)の動詞句は時間幅を持っていないと判断できる。(15a-c)には結果述語として、flat, clean, red がそれぞれ用いられており、これらは全て段階性及び境界を持つため、最大極点を有するスケールの形容詞として分析される。一方、(15d)には dead が結果述語として用いられており、dead という状態は段階性を持たないために非段階的形容詞として分析される。また、(16)の非能格動詞型結果構文では、結果述語として、threadbare, asleep, hoarse, sick が用いられている。これらの形容詞は、段階性は持つものの、明確な境界が認められないために開いたスケールの形容詞と分析される。以上の例で確認する限りでは、Wechsler の主張は結果構文における結果述語の分布を捉えていると判断できる。

さらに、Wechsler は事象間の時間関係に関して、遠隔の解釈を持つのは再帰代名詞を伴う結果構文だけではなく、非能格動詞型結果構文に対して当てはまるとしている。

(17) We laughed the speaker off the stage.

(Wechsler 2005: 270)

(17)は前置詞句を用いた非能格型結果構文であるが、主語である We が笑った事象と目的語である speaker が壇上を降りた事象は同時である必要はなく、遠隔の解釈が可能である。このことから、Wechsler は遠隔の解釈を許すのは再帰代名詞を伴う結果構文だけの現象ではなく、非能格動詞型結果構文全般に見られる現象であるとしている。また、他動詞型結果構文では遠隔の解釈は見られず、近接の解釈のみが可能であり、近接と遠隔の解釈の違いを、他動詞型と非能格動詞型の違い、つまり、動詞による目的語の選択性に求めている。

以上の Wechsler の主張をまとめると(18)のように表される。

(18) Wechsler (2005)の主張

	動詞句：時間幅	結果述語：スケール構造	近接／遠隔
他動詞型結果構文	時間幅あり	最大極点を持つ形容詞	近接
	時間幅なし	非段階的形容詞	
非能格動詞型結果構文	—	開いたスケールの形容詞	近接／遠隔
非能格動詞型（再帰代名詞）			

Wechsler は、他動詞型結果構文と非能格動詞型結果構文の分類が近接と遠隔の解釈の違いに対応しているとし、他動詞型結果構文においては、動詞句の時間幅と結果述語のスケールが対応関係にあると主張している。

(18)からもわかるとおり、Wechsler は、他動詞型結果構文において、時間幅を持たない動詞句をとるものには非段階的形容詞が結果述語として起こるとしている。しかし、動詞句が時間幅を持たないにもかかわらず、非段階的形容詞が結果述語に現れない場合がみられる。

(19) a. The door broke open.

b. #It took three minutes the door to break open.

(19a)の例では、**the door broke** という時間幅を持たない動詞句に対して、最大極点を持つスケールの形容詞である **open** が結果述語として生起しており、(19)の例は Wechsler の予測に反している。(19a)は **break** が非対格動詞として用いられた結果構文の例であるが、**break** は非対格動詞で用いられた場合、主語の名詞句が壊れたという一時点のみを表し時間幅を持たない。(19b)は、(19a)の結果構文が表す事象が3分間という一定の時間を要したことを表しているが、そのような解釈は成り立たず、非対格動詞として用いられる **break** が時間幅を持っていないことがわかる。このことから、他動詞型結果構文では、結果述語のスケールが動詞句の時間幅との対応で決定するとする Wechsler の主張は妥当ではないということになる。

このことは、**break** という動詞が持つ意味特性に起因するものと考えられる。**break** は確かに非対格動詞で用いられた場合には時間幅を持たないが、(20a)のように他動詞で用いられた場合には、時間幅を持つ動詞として現れる。

- (20) a. John broke the door open.
 b. It took three minutes John to break the door open.

(20a)は、**break** が他動詞として用いられている結果構文の例であるが、(20b)にみるようにドアを壊すのに一定の時間を要したという解釈が可能であることから、他動詞として用いられる **break** は非対格動詞の用法とは異なり、時間幅を持つということがわかる。これは、本来 **break** という動詞は時間幅を持っているものの、「壊れる」という非対格動詞の用法では、壊すという行為が背景化され、「壊れる」という対象の状態変化に焦点が当たり、一時点のみが表されているものと考えられる。Levin & Rappaport Hovav (1995)は、非対格動詞の **break** の意味表示を(21)のように示している。

(21) 非対格動詞の **break**

[[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME BROKEN]]



φ

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 108)

(21)は不特定の誰かの行為によって、ある対象が壊れるという状態変化を引き起こすという事象を表している。以上のことから、非対格動詞としての *break* が、壊れるまでの事象を含意していることがわかる。つまり、(19a)において、言語化されている *the door broke* という事象は時間幅を持たないが、背景化された時間幅を持った事象が原因事象として認識されていると考えられる。そのため、最大極点を持つスケールの形容詞が結果述語として共起しているものと捉えることができる。つまり、(19)の例は時間幅を持つ原因事象に対して、最大極点を持つスケールの形容詞が結果述語として用いられていることになるので、Wechsler の主張に大きく反するものではない。

4.2 事象間の時間関係の決定要因

最後に、結果構文における事象間の時間関係の決定要因について考察する。従来の研究では、結果述語は動詞が表す行為の結果状態を表すとされてきた (Dowty 1979)。しかし、Wechsler は、他動詞型結果構文に用いられる結果構文は目的語の状態変化の抽象的経路を表すと主張している。つまり、他動詞型結果構文では最大極点を持つ形容詞及び非段階的形容詞が結果述語として用いられるが、これらの結果述語は単に目的語の状態変化の終点を表すだけでなく、目的語が行為による結果状態へと移行するまでの経路をも表しているという。

(22) 他動詞型結果構文 (= (1))

- a. John hammered the metal flat.
- b. The waitress wiped the table clean.
- c. Mary painted the wall red.
- d. Chris shot Pat dead.

(22a)では、John が金属をハンマーで叩くことにより、金属が変形し、その結果として平らな状態となるが、その金属の状態変化の過程には抽象的経路、つまり、隆起した状態から平らな状態への段階的な移行が含意される。Wechsler は、この段階的な経路が最大極点を持つ形容詞の段階性によって表されるとしている。一方、(22d)では、動詞が表す行為が時間幅を持っておらず、Pat の状態変化において段階的な経路が含意されない。この段階性を持たない経路を表すために、非段階的形容詞が結果述語として用いられるというので

ある。

一方、Wechsler は、非能格動詞型結果構文に現れる結果述語はこのような状態変化の経路としての機能を持たず、動詞が表す行為の結果状態を表すとしている。非能格動詞型結果構文で用いられる結果述語は開いたスケールの形容詞であり、最大極点を持たないために行為の終結点を示すことができない。そのため、結果述語は行為の終結点までの段階的経路を表すことができないものと考えられる。

この Wechsler の主張が正しいとすると、事象間の時間関係は、結果述語の機能と対応関係を示すことになる。つまり、結果述語が状態変化の経路として機能する場合は、結果構文が含む両事象が近接関係に限定され、一方、結果述語が行為の結果状態を表す場合は、両事象は遠隔関係の解釈が認可されることになる。

しかし、このような結果述語の機能と事象間の時間関係は必ずしも対応しない。Wechsler は、他動詞型結果構文に用いられる全ての結果述語が抽象的経路を表すとしているが、実際には、結果述語が行為の結果状態を表す他動詞型結果構文が存在する。(22b,c)の結果構文においては、結果述語は目的語の状態変化の経路を表さない。このことは、次の事実から確認できる。

(23) Jack painted the house very bright.

(小野 2007: 83)

(23)では、(22c)と同様に paint という動詞が用いられており、結果述語が very によって修飾されている。(23)は他動詞型結果構文であるため、用いられる結果述語は最大極点を持つ形容詞であるはずである。しかし、副詞 very は開いたスケールの形容詞を修飾することが指摘されている。

(24) John is *completely/very tall.

(小野 2012: 96)

(24)に示されるように、開いたスケールの形容詞は、極点を含意する completely などの副詞では修飾できず、very のような程度を表す副詞によって修飾される。このことから、(23)に用いられている bright が開いたスケールの形容詞であることがわかる。すると、(22c)に現れる結果述語は、結果状態までの抽象的経路を表すものではなく、動詞が表す行為による目的語の結果状態であるということになる。もし、(22b, c)の結果述語が、(23)と同様の

性質を持つとするならば、これらの結果述語は最大極点を持つ形容詞でありながら、目的語の状態変化の抽象的経路ではなく、結果状態を表すということになる。

Tenny (1994)は、(22b, c)及び(23)の結果構文に現れる目的語が動詞のアスペクトを限定する機能を持ちうることを指摘している。

- (25) a. The waitress wiped the table.
b. Mary painted the wall / the house.

(25)は、(22b, c)及び(23)の結果構文の結果述語を除いたものであるが、これらの文の解釈は、動詞が表す行為が終結しているという解釈と、終結していないとする解釈が話者によって異なる。(22b, c)及び(23)の結果構文に共通する性質として、これらの目的語 NP がメトニミーとして機能するという点が挙げられる。(25)に現れる目的語 NP が表す意味内容は、その名詞が指す対象そのものではなく、その対象の表面である。すると、その表面積がアスペクト限定詞として機能した場合に、動詞が表す行為が終結しているという解釈が生まれると考えられる。

ここで、上記のように目的語 NP がアスペクト限定詞として機能した場合に、これらの対象の表面積が動詞が表す行為の経路として機能すると仮定する。すると、もし(22b, c)に現れる結果述語が Wechsler の主張のとおり抽象的経路を表すとする、これらの結果構文内において二つの異なる種類の経路が含まれることになる。しかし、ある対象に対し異なる種類の経路が存立することは、単一経路制約 (Unique Path Constraint)によって禁じられる (Goldberg 1995)。結果構文において二つの異なる種類の経路が存立できないことは、次の例から確認できる

- (26) *Sam kicked Bill black and blue out of the room. (Goldberg 1995: 81)

(26)の結果構文内には、結果述語である **black and blue** によって表される抽象的経路と、前置詞句である **out of the room** が表す物理的経路とが含まれており、単一経路制約に反するため(26)が非文法的となると考えられる。

もし、(22b, c)の結果構文において、目的語 NP の表面積が行為の抽象的経路として機能し、かつ、結果述語が目的語の状態変化の抽象的経路を表すとするならば、同一の結果構

文内に二つの異なる種類の経路が含まれることになり、単一経路制約に違反することになる。しかし、これらの結果構文は文法的である。

この事実は、(22b, c)の結果述語が状態変化の経路を表しているのではなく、動詞が表す行為による目的語の結果状態を表していることを示唆している。つまり、本来最大極点を持つ形容詞が結果述語として起こる場合は、その形容詞は状態変化の経路を表す機能を持つが、(22b, c)の例では、結果述語が状態変化の経路を表す機能から目的語の結果状態を表す機能へと変化しており、そのため単一経路制約の違反を回避していると考えられる。

以上のことから、他動詞型結果構文の中には結果述語が目的語の結果状態を表すものがあり、これらの結果構文では目的語が状態変化の経路としての機能を担うことがわかる。これらの結果構文では、目的語による状態変化の経路としての機能により事象間の時間関係が近接関係に限定される。すると、結果構文に含まれる原因事象と結果事象との時間関係を決定する要因は、結果述語の機能だけではなく、目的語が持つ機能によっても左右されることになる。このことから、結果構文における事象間の時間関係の決定要因は、結果述語のスケール構造及びその機能だけでなく、目的語が持つ状態変化の経路としての機能も含まれることになる。

5. 結語

本稿では、はじめに、結果構文と結果の解釈を有する等位接続を比較し、両者の間に共通の原理が働くことで、共通して結果の解釈が得られることを指摘した。また、両者の間には、結果の解釈のみならず、原因事象と結果事象との間にみられる時間関係においても共通性がみられ、近接関係と遠隔関係という二種類の時間関係が存在することを確認した。さらに、結果構文の事象間の時間関係を決定する要因として、結果述語のスケール構造が関与することを確認し、近接関係のみを表す他動詞型結果構文では非段階的形容詞と最大極点を持つスケールの形容詞が、また、遠隔関係の解釈を許す非能格動詞型結果構文では開いたスケールのみが用いられることを、Wechsler (2005)の分析に従い、指摘した。最後に、その時間関係の決定要因が結果述語のスケール構造のみに限られず、結果述語、もしくは目的語が持つ機能も含まれることを主張した。

付記

本稿は、平成 24 年度学習院英文学会大会（平成 24 年 11 月 17 日）及び早稲田大学英文学会・英語英文学会 2012 年度合同大会（平成 24 年 12 月 1 日）における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

発表及び原稿執筆に際しては、指導教授である中島平三教授をはじめ、多くの方々から貴重なご指摘や助言を頂いた。ここに記して感謝したい。

注

- (1) 付加的な意味を与える非対称的な等位接続文には、結果の解釈の他、時間系列を表すものや条件の意味を付加するものなどが存在する。詳しくは、Culicover and Jackendoff (1997)及び Goldsmith (1985)を参照。
- (2) 結果構文を二つの下位事象から成る複合事象であるとする研究については、Dowty (1979), Rothstein (2004)を参照。
- (3) Rothstein (2004)は結果構文が表す事象を複合事象として捉え、その意味表示を次のように示している。
 - (i) $RSUM[\alpha, \beta] = \lambda y \lambda e. \exists e_1 \exists e_2. [e = {}^s(e_1 \cup e_2) \wedge \alpha(e_1, y) \wedge \beta(e_2, y) \wedge TPCONNECT(Cul(e_1, e_2, y)]$ (Rothstein 2004: 76)
 - (ii) (i)は、原因事象 e_1 と結果事象 e_2 の間に共通の項を持ち、原因事象の終結点において結果事象が時間的に重なっていなければならないことを示している。
- (4) 形容詞のスケール構造は Kennedy and MacNally (1999), Hay et al. (1999)によって定式化されたが、Wechsler (2005)で用いられるスケール構造とは多少異なっている。詳しくは Kennedy and MacNally (1999), Hay et al. (1999)を参照。

引用文献

- Boas, Hans C. (2004) "Resultative constructions in English and German." Linguistics Department, University of North Carolina: PhD dissertation.
- Culicover Peter W. and Ray Jackendoff (1997) "Semantic Subordination despite Syntactic Coordination." *Linguistic Inquiry* 28, 195-217.
- Dowty, David R. (1979) *Word meaning and Montague grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Dummet, Michael (1978) *Truth and other enigmas*. Harvard University Press.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldsmith, John (1985) "A Principled exception to the Coordinate Structure Constraint." In *CLS 21. Part 1, The General Session*, 133-143. Chicago Linguistic Society, University of Chicago, Chicago.
- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin (1999) "Scalar Structure Underlies Telicity in 'Degree Achievement'." *Semantics and Linguistic Theory* 9, 127-144.
- Kennedy, Christopher and Louise MacNally (1999) "From Event Structure to Scale Structure: Degree Modification in Deverbal Adjectives." *The Proceedings of SALT 9*, 163-180.
- 小野尚之 (2007) 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」小野尚之編『結果構文の新視点』ひつじ書房。
- 小野尚之 (2012) 「結果構文の意味論」澤田治美編『構文と意味』ひつじ書房。
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An event structure account of English resultatives." *Language* 77: 766-797.
- Schmerling, Susan (1975) "Asymmetric conjunction and rules of conversation." In *Syntax*

- and semantics 3: Speech acts*, ed. Peter Cole and Jerry L. Morgan, 211-231. New York: Academic Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An event structure account of English resultatives." *Language* 77: 766-797.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events*. Oxford: Blackwell Publishing.
- Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer, Dordrecht.
- Wechsler, Stephen (2005) "Resultatives under the 'Event-Argument Homomorphism' Model of Telicity." In Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport (eds.) *The Syntax of Aspects*, 255-273. Oxford: Oxford University Press.